

<書籍紹介>

切通堅太郎・西藤真一・野村実・野村宗訓著『モビリティと地方創生』

2021年9月、晃洋書房

近畿大学経営学部教授 高橋 愛典

Yoshinori TAKAHASHI

なんと魅力的で、時宜に叶ったタイトルだろうか！本書を手にした瞬間からそう感じたのは、決して評者だけにはあるまい。果たして中身も、タイトルに負けず劣らず、魅力的で時宜に叶っている。

まずは本書の全体構成を示しておきたい。章ごとの要約は「はじめに」で十分な紙幅をもって示されているのでここでは省略し、一方でカッコ内に各部の著者名を敬称略で示す。となると以下は、全体構成というより目次そのもののようにも見えるが、本書の最大の特徴はこの4部構成、さらにはそれらの相互連関にあると評者は考える。

はじめに

第Ⅰ部 航空自由化後の地方空港改革（切通堅太郎）

- 第1章 LCCのもたらしたインパクトと期待
- 第2章 空港民営化の多様性と実効性
- 第3章 「地方空港」の実態と有効活用策

第Ⅱ部 鉄道民営化と地方路線の維持方策（西藤真一）

- 第4章 鉄道のあり方を模索する日英の課題
- 第5章 日本の鉄道廃止路線のケーススタディ
- 第6章 旅行者にとっての鉄道とモビリティ

第Ⅲ部 地方における多様なモビリティの模索（野村実）

- 第7章 中山間地域のモビリティの現状と課題
- 第8章 MaaSの発展によるモビリティの変革
- 第9章 ユニバーサル社会の実現に向けた多様なモビリティの展開

第Ⅳ部 物流・観光の変容と次世代技術のインパクト（野村宗訓）

- 第10章 欧州郵便事業者の物流・バス会社化
- 第11章 新型コロナ後の観光と地方ネットワーク
- 第12章 次世代技術導入で激変するモビリティ

結び

要は、4名の共著者が3章ずつ執筆し、合計12章からなる単純明快な構成である。共著者名の並びも執筆順に拠っており、編者を明示していない（共著者4名があくまでフラットな関係である）のも特徴といえる。共著書といってもいわゆる教科書とは性格が大きく異なるし、さりとて章の間の相互連関が乏しく論文集のような体裁になってしまった研究書ともまた違う。各部はそれぞれの共著者が独自の世界を展開している一方で、部と部の間の連携が緊密であり「メドレーリレー」が成り立っている。それは共著者間の親密な知的交流の賜物であろう。具体的には、第Ⅰ部の航空・空港から第Ⅱ部の鉄道・観光、そして第Ⅲ部のMaaS・自転車へとメインテーマが次々と替わり、第Ⅳ部ではそれを受けて陸（バスや物流を含む）・海（液化水素運搬船や電動フェリーを含む）・空（ドローンを含

む)、さらには宇宙空間にまで、議論のスケールが広がっていく。共著者がそれぞれ、受けたボールを自分のフィールドで華麗に転がし、次の部に美しいパスを出しているのである。共同研究の成果をまとめる手法としても、裨益するところは大きい。

一方で、これだけの成果をもたらしながらも、惜しまれる点がある。それは、肝心の「モビリティ」と「地方創生」について「結び」にあるように「実態や今後の方向性」をまとめているとしても、概念的な検討が十分になされておらず、両者の関係についても明示的に論じられていないことである。共著者の間で、緻密な議論がなされ、それが共有されていることは間違いない。だからこそ、暗黙知を形式知として再構築してほしかった。具体的には例えば、各部の内容を持ち寄ってシンポジウムを開催し、パネルディスカッションの部分を「第Ⅴ部 座談会」として収録する、といった工夫があれば、読者にとってさらに親切な書籍になったように思われる（もっとも、そうすれば発刊までに時間を要し、本書に収録されている最新の事例が古くなり、追加調査が追い付かなくなっていたかもしれない）。今からでも遅くない、出版記念シンポジウムが開催され「モビリティと地方創生」の本質ならびに相互連関について、一層真に迫った議論が形になることを期待したい。

繰り返しになるが本書は「モビリティと地方創生」というテーマは一貫しているとしても、取り上げられるテーマや交通機関は多様である。それゆえ、手に取って読む際につい、興味のある章を拾い読みあるいはつまみ食いする誘惑に駆られかねない。しかしそれよりも、本書全体を通読して共著者間の華麗な「パス回し」を堪能されることを、評者はお勧めする次第である。